

1 中山広場

19世紀末、極東に進出したロシアによって現在の勝利橋の北側、煙台街一帯の地にダルニー市街の建設がはじまり、近代都市大連発祥の地となった。日露戦争後の日本統治期に、ロシアの都市計画をうけついで、大広場（現在の中山広場）が、大連市街地の中心広場として、施政機構や銀行などのランドマーク的な建築群を周囲に配して整備されていった。

勝利橋以北

露西亞〔ロシア〕町／煙台街近代建築群・鉄道

1896花園酒店 近代都市大連の発祥の地。1899年、ロシアの都市計画の中心区域として、埠頭の西の大連湾に面した一角に、面積10haに及ぶ行政地区が計画された。ここに市役所や東清鉄道の管理部門が置かれたほか、それら機関の幹部職員や工員らの住宅が建設され、日本統治期には、露西亞町と呼ばれた。「この辺は露国の租借地の頃のダルニー気分を多分に現した一つの町を作って居ます。…露西亞町は静かなよい屋敷町、ただ冬石炭の煙が多いのが欠点です。」（林ふき子『影壁』『大連瞥見』1935）中でも歴史的な住宅建築を数多く今に残していたのが、団結街、煙台街、勝利路に囲まれた広さ3ha強の区画で、ここに残る28棟の住宅建築のうち、25棟が1901年から1905年のロシア統治期に建てられ、3棟が



ロシア時代の住宅建築が残る一帯

日露戦争後1910年頃までのものであり、市内でほとんど唯一ロシア時代以来の来歴をもつ稀少な住宅建築群であった。建物の老朽化が進む中で、当局の保存方針は定まらなかったが、最終的には鉄道部門が経営するコテージ式ホテルとして再生利用され、2013年7月に開業した。可能な限り当初の建材を残すなど保存に意を用いたとはいうものの、住民の一人残らず消え去ったこの街に、日常の景色の中に百年の時の重層的な記憶を秘めた、生きた暮らしの息吹を感じることは、もはやかなわぬこととなってしまった。南側の勝利街に面した一角には、映画監督の山田洋次が満鉄職員だった父のもとで少年期を過ごした邸宅が、カフェとして残されている。大連市文物保護単位。大連市不可移動文物。〔木〕 **A3**

ダルニー市役所 1898年、ロシアが東清鉄道事務所として造った建物。1899年7月より使用開始。建築面積4,889㎡。地上2階、地下1階。北欧ルネサンス式。1902年に市制施行によりダルニー市役所となった（-1904.5）。日露戦後は遼東守備軍司令部、関東州民政署（1905.6-）、関東都督府民政部（1906.9-）、満鉄本社（1907-）、二代目の大連ヤマトホテル（1908-）、大連医院（1908-）、満蒙物資参考館（1925.3-）、満蒙資源館（1926-）、満洲資源館（1931.12-）、とめまぐるしいほど転用された。ヤマトホテル時代の1909年秋には夏目漱石もここに投宿した。さらに解放後は東北地質博物館、東北資源館（1950-）、大連自然博物館（1959-）として使用された。1996年



老朽化が著しいかつてのダルニー市役所

に全国重点文物保护单位に指定され、建物は一度修繕されたが、大連自然博物館が1998年に黒石礁に移転したため、近年は荒廃に任せて放置されている。西岗区煙台街3号(旧・児玉町) [大] **A2**

市長サハロフ公邸／大連船舶学校 1902年頃に竣工した、地上3階、地下1階のレンガ造り建築物。当初は東清鉄道技師長官邸として建てられたが、のちに技師長のサハロフ氏がダルニー市長をも兼任したため、そのまま市長公邸となった。しかし、わずか二年後の1904年5月末、サハロフは大連在住のロシア人住民500名あまりを連れて、徒歩で旅順への逃亡を余儀なくされる。金州南山のロシア軍堡壘が日本軍の猛攻で陥落し、建設中の大連市街を放棄せざるをえなかったからだ。やがて満鉄が創設されると、建物は初代総裁・後藤新平の公邸になった。二代目総裁・中村是公の在任時に、満洲旅行に招待された夏目漱石もここに訪れている(1909年9月)。西岗区団結街7号(旧・児玉町) [大] **A2**



旧サハロフ公邸

露国寺院→大連尋常高等小学校→満鉄医院(初期) 当初は、煉瓦塀に囲まれた2階建のロシア風の建物で、礼拝堂には300人が座れる椅子があったという。1903年ロシア東省鉄路局がこのダルニー教堂の一部を借りてダルニー小学校を開いた。1906年5月、この建物を校舎として大連最初の小学校、大連小学校が開校する。校長は金子忠平。当時建物はかなり荒れ、「日も通さない薄暗い教室、泥に塗りつぶされた床、危

なげな階段、狭い中庭の運動場」(『創立三十年記念誌』)と描写されている。開校当時は生徒が75名であったが、半年後の9月には251名、一年後には688名と急増したため、1907年11月、東公園町(魯迅街)に移転し、もとの建物は満鉄病院の一部となった。1908年に、ロシア人所有者のアブラミンから日本人に売却され、その後日本人の間で所有権は転々としたという。旧山城町の建物は現存しない。(旧・山城町) [平]

A3

北公園／北海公園 ロシア占領時代に作られた公園。満鉄が1907年に完成させた。ロシア町の中央に位置し、北は波止場、西は満鉄病院などの施設、東は電車道や満鉄住宅に囲まれていた。当初の公園は、周りにロシア式の積み方をしたレンガ塀がめぐらされ、入り口近くに水鳥や鶴などが飼われたケージがあった。「余は股野と相乗りで立派な馬車を走らして北公園に行った。と云うと大層だが、車の輪が五、六度回転すると、もう公園で、公園に這入ったかと思うと、もう突き抜けて仕舞った」(夏目漱石『満韓ところどころ』1909) また、公園内の丘にあったロシア風の丸太小屋がいまも残されている(大連市不可移動文物)。元は埠頭にあったもので、1923年に公園内に移されたという。テニスコートや子ども向けの遊具も備えられ、こぢんまりとしながらも近隣の住民に親しまれたという。西岗区上海路西側北海公園(旧・露西亞町) [大]

A2



北海公園近くのロシア風丸太小屋